

## 休日のおでかけ

鳳凰高等学校 一年

笹木千蔭

散歩……というのがどの程度のことを指すのかよくわからない。  
しいて言うならば一カ月のうちの何日か、猛烈にどこか知らない場所を歩きたくなるのだ。

僕はこれを放浪癖とかっこよく呼んでいたが、放浪といっても大層なものではなく、家から近い公園だったり、少し遠い町だったりなどの普段全く縁のない場所を歩くだけだ。だが、童心にかえるような冒険家心もあいまって、どこか新鮮で清々しい気分になった。大学生になってから始まった、この行き先のないロング・ウォークは、ストレス発散にもなり、僕にとってはなくてはならない一種の習慣と化しつつあった。自己紹介という名の一人語りになるが、僕は今年で大学の三年生になる。学部は文学部国文科。サークルは壁新聞サークル「壁と我ら」に所属している。活動は年六回。偶数月に学内掲示板に貼る壁新聞を発行している。

去年は紙面上で婚活マッチングアプリ紛いのことをしたり、一面全てを我がサークル部長の特集記事にしたりと迷走気味

だったが。

そもそも壁新聞って需要があるのだろうか？

まあそれは置いて。

ちょうど三カ月前のことだったと思う。

確かそのときの記事のテーマは絶品！ きゅうりの漬物についてというものだった。

というか、なぜ部長が二月号に、夏の野菜であるきゅうりの特集したかったのか、分からなかったけれど。

結局、白だし一本でできて箸が止まらないとレビューに書いてあったメニューを調べて書いた。

しかし、とんと興味のないことを調べるとストレスが溜まるのが僕の性質らしい。

原稿を書き終えた次の日、僕は少し遠くの町へ長い散歩がてらに向かった。

僕が住んでいたアパートは、都心はかなり近いところにある。

このあたりは、若者に人気な雑貨店やカフェが多く立ち並んでいて、家賃の相場もかなり高い。

しかし、僕のアパートは相場の半額以下だった。どうやら前の住人は入居して二か月で退去したらしい。なぜか知らないけれど。

でもたまに夜中にキイキイと何か軋む音がする。おそらく気のせいだろうと思うけど……。

築四十年。それ以上は恥ずかしいから言えないが。古民家

と言えども聞こえのいい、ただのポロ家だ。

そのポロ家を朝の七時頃出ると、近くの駅へ向かった。

休日でもまだ朝が早い為か、行楽客はそれほど多くはない。

改札を抜けると駅のホームへと向かう。

東京に来てから数年経つが、満員電車とピロロロ……と鳴る電車到着の音、改札を抜けるときのこの小鳥が鳴くような音は、どうしてもザ・都会のような感じがしてまだ慣れない。

電車がくるたびに、乗り遅れないか行き先を目を凝らして確認し、たまに右往左往してしまうあたり、まだ僕も都会人とは言えないのだろう。

五分ほどで電車はきた。目的の町までは電車を三本乗り換ええないといけなかった。

十五分ほど乗っただろうか。

最初の駅から四つ先の駅で降りると、ちょうどやってきた次の電車に乗り換えた。

そうしてすぐ五つ先の駅で降りると次の乗り換えの電車を待つ。

自販機で綾鷹を買うとやってきた電車に乗り込んだ。

なぜホットにしなかったか？

電車の中は結構、暖房が効いてるからね。ちょうどいいと思っ

電車の中は案外空いていた。

さらに車両の端の方へ行くと乗客はほとんどいなかった。僕がガラ空きの青いシートに腰掛けるのと同時に電車は動

き出した。

ゴトンゴトンと電車が進むと共に、細かな振動が体に伝わってくる。

それがとても心地いい。だんだんと瞼が垂れ下がってきた。

そういえば昨日、二時までBSで八甲田山見てたっけ……。プシューと電車の扉が開く音で目が覚めた。

アナウンスを聞くとどうやら降りる予定の一つ前の駅だった。

スマホを見ると一時間以上経っている。

結構長い間寝ていたらしい。

急いで電車を降りると改札を抜けた。

駅から出ると学生らしき人がかなり駅前通りを歩いていた。近くに大学のキャンパスがあるためだろう。そういえば高校時代に通っていた高校もこんな町にあった。

どこか懐かしさを覚えつつ、僕は町の中を散策した。歩いているうちに、お昼時になった。

お腹は空かないが、無性にコーヒーが飲みたくなった。どこかに喫茶店はないかと探していると、喫茶ひぐらしと書かれた看板が目についた。

駅前通りの少し裏に入ったところにあっただが、お昼時だからか、店にはいると客の数は多い方で、ときたま人の話し声が耳に入った。

カウンターに座ると壁にかけられたマリリンモノローのシルクスクリーンが目につく。店主の趣味なのだろうか。

カウンスラーに座ると壁にかけられたマリリンモノローのシルクスクリーンが目につく。店主の趣味なのだろうか。

見渡すと、トマト缶が壁にかけられていた。

何を飲むか、なかなか決まらなかったが、結局メニューの一番上に書いてあるアメリカンを注文した。

注文を受けた店員が戻ると隣の席が騒がしくなってきた。座っているのは二人とも学生で、社会主義か何かを研究しているらしく、マルクスがどうだのエンゲルスがどうだのと議論している。この二人の名前を聞くと高校の頃の政経の授業を思い出す。

政経の授業は聞くだけで頭がオーバーヒートしていたな。初老の店主が「うるさくてすいませんねー」と言っアメリカンを運んできた。

このアメリカンは香りも良く、コクがあり、しっかりと置いて飲みやすい。

普段、安い缶コーヒーを飲み慣れている僕にとってみれば、今まで味わったことがない美味しさだった。

「すいません。ここしか空いてなくて。隣座っても大丈夫ですか？」

すると突然見知らぬ女性に声をかけられた。学生だろうか。彼女は、白いブラウスを着ており、全体的に整った顔立ちをしていた。

コーヒーをこぼしたらシミになりそうだな、そんなことを思った。

「どうぞ」と僕が言うと彼女は会釈をして僕の隣の席に座った。

店内はあいかわらずの満席だ。

やっぱりこの美味しさがみんなわかってるんだな。

……というか僕アメリカンしか頼んでないから他はわからないけど。

ふと横を見ると隣の席の彼女も、僕と同じくどれを頼もうか迷っているみたいだった。

「この店はよく来られるんですか？」

「実は今日が初めてなんです。急遽、この近くの叔母の家に行かないといけなくなってしまいました。どこか軽く昼食を摂ろうと思ってここに」

そう言って微笑んだ。

「じゃあアメリカンはどうかな。実は僕も初めてで、さっきこれ頼んでみておいしかったからさ」と僕は言った。

「じゃあそれにします」

ついでに彼女と一緒に僕もサンドイッチを注文した。

「あ、私も大学生なんですよ。自己紹介がまだでしたね。綿貫千尋といいます。」

ついでに大学名も聞いてみると、なんと僕と綿貫は同じ大

学だった。詳しく聞くと、綿貫は僕と同じ文学部の英文科で一つ下の二年生だった。

「児童文学を専攻しているんですよ」

「そうなんだ。僕は国文科だよ。昔から読書が好きなんだけど、英語はからっきしでね」

「あつ読書がお好きなんですか？ 私もなんですよ」

大人しそうに見えた彼女の目の色が変わった。どうやら彼女も読書が好きらしい。

「どのジャンルをよく読む？」

「いろいろ読むんですけど、恋愛ものとか感動ものが多いですね。後、ラノベとかもよく読みます」

そう言っただけで彼女がいくつか挙げた小説の題名は、映画化やアニメ化したりして僕の知っているものもあった。

「冴えくは読んだ？」

「はい！ 私、帽子を風で飛ばされたヒロインと主人公が出会うシーンがすごく好きで」

「あつたあつた。確かヒロインに心惹かれるシーンだよな？ アニメで見たけど、あれはすごくよかつたなあ」

「他にも主人公のオタクっぽさが全面に出ていてそれが……」

どうやらスイッチが入ってしまったようだ。

堰を切ったように綿貫は喋り出し、気がつくのと夕方だった。店内の客の数もいつの間にか減っており、僕らを含めて数人

ほどしかない。

「綿貫はアニメや小説が好きなんだな」

「はい！ 大好きです」

「好きなものがあるって良いことだよ」

僕がそう言うのと彼女はなぜか頬を赤らめて「はい」と答えた。

「あの……」

「どうかした？」

「また一緒に出かけませんか？」

「ああ、うん。他に用事もないしいいよ」

そう言っただけで僕と綿貫は連絡先を交換した。

「もう夕方だし、そろそろ帰ろうか」

「あ、じゃあ私も一緒に」

駅に着くと夕方だからか人でごった返していた。

「あれ、そういえば叔母さんの家に行くんじゃないか？」

「実はもうすでに寄ってきたので大丈夫ですよ」

と早口で答えた。しかし、目線が僕と合っていない。何かありそうだけど追及するのはやめておこう。

「そ、そんなことより電車がきましたよ。早く乗りましょう」  
帰りは停車駅に限られた快速電車のため、来た時とは違って俄然速い。

隣では睡魔に打ち勝とうと、綿貫が目を白黒させていた。僕がそれを観察しているのに気付くと「忘れてください」

と顔を真っ赤にして恥ずかしそうに言った。

そんなこんなしているうちに、あつという間に降りる駅に着いた。

「また一緒に出かけたいです。先輩、楽しみにしていますね」

「ああわかった」

そう言っただけで僕と綿貫は別れた。

歩きながら今日あつた出来事を思い返す。

あの喫茶店のアメリカン、そして綿貫である。最近の女子

というのは、あのように初対面の人間と連絡先を交換するのだろうか。

あまり友人が多くない僕がわかるはずがないのだが。そのせいか知らない女性に声をかけられると美人局を疑ってしまうのが僕の悪い癖。とまあこれは冗談。

あの喫茶店にはもう一度行こうかな。

自炊すればよかったが、僕は基本めんどくさがり屋で、結局コンビニで爽健美茶と唐揚げ弁当を買って家に戻った。夕食の唐揚げ弁当を食べながら、溜まりたまったテレビの録画を見る。見ても見ても終わらず、三分の一ほど消化したところで寢床についた。

遠くまで出かけて疲れていたからか、寢床についたのは十時前と早い時間だったと思う。

早く寝たせいか、夜中の二時頃に目が覚めてしまった。

トイレに立ち、寢床に戻ろうとすると例の如くキイキイどこかで軋む音がする。

いつもなら無視して寢床に戻るが、今日は珍しくその音がどこから鳴るのか暴いてみよう、と思った。

音はベランダの方から聞こえてきた。

僕の部屋は一階だった。

スマホのライト機能をオンにすると、おそろおそろ近づき、窓を開けてベランダの方を照らす。

すると端の方で昼間とうってかわって野暮ったい眼鏡をかけ、目を閉じて蹲っている影がいた。

全身を藍色と黒で統一し、見事に夜闇の中へ溶け込んでいく。

耳にイヤホンをはめていて、それが手に持っている黒いトランシーバーのようなものに繋がっていた。

まだ見つからないかと思っているのか微動だにしない。

「なあ綿貫」

僕が声をかけるとピクツとその影が動いた。顔を見なくても焦りが伝わってくる。

「なんで僕のアパートのベランダに蹲っているんだ？」

「こ、こ、こんばんは。せ、先輩」

そこには焦りのあまり噛みまくる綿貫千尋の姿があった。